

医道

さまざま

「医」を訪ねて

第二回 医学教育後編

「交ざる」～医学教育改革の道標～

特集「医学教育」の後編では、日本全体の教育を
発展させるために多方面で活躍されている、東京大
学名誉教授で日本学術会議会長の黒川清先生（昭37
卒）にお話を伺った。

黒川先生は日本と米国両方での医学教育経験を持
つ数少ない日本人の1人である。その黒川先生が日
本の医学教育に求めること、それは「交ざる」ある
いは「外に出る・出す」こと。「交ざる」とはどうい
うことなのだろうか。なぜ今、日本医学教育には「交
ざる」が必要なのか。

「交ざる」教育制度

黒川先生は東京大
学を卒業してから7年
間、同大学附属病院イ
ンターン、助手などを務
めた後、米国のペンシ
ルベニア大学に留学し
た。研究・臨床両方を
経て、1979年にU
CLA（University
of California, Los
Angeles）の内科教授
になったわけだが、渡米
して15年目の1983
年、東大の第四内科助
教授として日本に帰国し
た。「帰国した当初はそ
の後も日本で暮らすかは
決めていませんでした。
でも東大の学生をみると
米国の生徒に劣らず優
秀なのに、教育は彼らを
full potential にして
いないという現状に気付
いたのです。これはまず
いなあと、私の使命
は日本での教育だと感じ
たわけです。」と黒川先
生は言う。先生の目から
見て、米国の教育者が教
える・育てることに熱心
で、また教育を仕事だと

認識していたのと比較し
て、当時の日本はその雰
囲気に欠けているように
感じたという。

米国では、まず4年制
の大学（これも Under-
graduate という）で
リベラルアーツを中心
に修了後、大学院とし
て medical school に
進学して、さらに4年
間学ぶというシステム
である。米国の大学院
では一般的なことだが、
medical school はリ
ベラルアーツを学んだ大
学とは異なるのが常識
だ。さらに卒後臨床研修
先は全国規模のコンピュ
ーターマッチングにより決
定される（このマッチング
方式は近年日本でも導入
された。つまり医師にな
るまでの全ての段階にお
いて常に他と交ざり、外
の目に曝されるのである。
この「交ざる」システムが
米国の医学教育の質を保
証していると先生は言う。
「私たちは学生をこのよう
に育てたということを外

これは同時に社会の人々
に対する大学の責任でも
あります。信用は一度失
うと大変。でも緊張感が
あつて楽しいですよ。」さ
らに先生は、「交ざらなけ
れば教育の評価などでき
っこない。」と断言する。
日本では教育者の評価
が遅れていると言われる。
その原因として、教育の
結果が現れるのには時間
がかかるため評価にも長
期間を要すということが
あり、さらには何をもち
て評価するかが難しいと
いうことも挙げられるだ
ろう。しかしこの現状も
「交ざる」制度を導入する
ことによって突破口が見
出せるのかもしれない。

改革は若い人から

「交ざる」ことが日本
でなかなか進まないの
は、制度の問題以前に意
識に問題があるからだと
黒川先生は指摘する。「終
後も同じ大学の医局内と
関連病院等で働くという
もの」、1つのタテ社会
のタテ組織内で働き続け
ることで戦後の日本は成
功してきました。医学教
育においても同様に、卒
後と同じ大学の医局内と
関連病院等で働くという
交ざらない制度のもとで

今日まで発展してきたの
で、このままでいい、う
まくいっていると思つて
しまふんですね。でもこ
れからはそんな意識は通
用しません。グローバル
化した今、急に『学』の
重要性が叫ばれるよう
になってきました。つい
この間までは、社会に出
てから教育するから、大
学ではそんなに勉強しな
くてもいいよなどと言つ
て、大学教育の重要性を
訴える人はほとんどいな
かった。いい大学に入れ
るかどうかが問題で、そ
の後大学がどのような学
生を卒業させようと人々
はあまりお構いなしだ
つた。」新しい「交ざる」
制度を導入するに至るに
は、学生を外に出そうと
いう雰囲気当たり前に
なるくらい意識が変わら
なければならぬ。それ

外を聞きながら

「若い人は広く外を見
てきてほしい。若い人を
外に出してやり
なさい。」黒川先
生が若者に外の
世界を体験する
ことを勧めるの
はもちろん医学
教育改革のため
だけではない。
「外に出て常識を
覆されるような
ものを見てくる
すると視野が広
がります。一人
一人は素質があ
るけれど、自分
は何がやりたい
かということ
はたくさんもの
を見ないと分
からない。将来
への選択権は若い

ではどうすれば意識を変
えて新しい制度を導入で
きるのか。「日本ではな
かなか出来ない、という
言い訳をするのは既得権
のある人々です。交ざる
ことで教育者の実力が明
らかにになれば、彼らは既
得権を失いかねません。
そのリスクを自ら冒して
改革をするのは難しいこ
とです。だから若い人た
ちが中心に動くしかあり
ません。」と先生は言い
切る。「若い人が広く外
の世界を見てくる。帰つ
て他の人々に伝える。ま
た他の若い人が外の世界
を見てくる。これを繰り返
すことで、日本での常
識が世界では非常識だと
いうことを体験してきた
人が次第に増えてくる。
それが改革の原動力にな
るのです。」

と思つてもいいのです。
低い山にもその山なりの
魅力があるのですから。
低い山の存在にも気付い
てそれぞれに敬意を払え
るようになるでしょう。
とにかく、尊敬できる
人々がたくさんいること
が分かり、お互いを個人
として認識し、尊重し合
えるようになるのです。」

黒川先生は学生の短
期留学、米国流の講義手
笑顔を。

一人の個が変われるよう ～野球投手～

黒川先生は個の持つ力
を重視する。「二人の人
間が変わえられることは想
像以上に大きいし、重要
です。たとえば野球の野
茂投手が良い例です。10
年前の彼の渡航、そして
メジャーリーグでの活躍
が、情報技術の発達で瞬
時に世界中に発信される
ようになってから、日本
の野球界やそれに関係す
る企業は大きく変化する
ことを余儀なくされまし
た。社会全体に影響する
力を一人的個がもってい
るのです。」しかし誰も
彼もが社会を変えられる
ような才能をもっている

法の導入、ハーバード大
学の学生の招致など、学
生や若手の医者に外を見
る機会を与えるようなプ
ロジェクトを実践してき
た。「留学先から学生が
e-mail で報告してくれ
ます。するとその学生の
視野がぐんぐん日増しに
広がり、熱意が湧いてき
ている様子がぐつと胸に
伝わってきますよ。」と
笑顔だ。

なぜ米国が？

なぜ米国式の教育導
入を黒川先生が目指して
いるかという疑問への鍵
は、個の持つ力について
の話とつながっている。
「米国は移民の国で、ど
うすれば個として生きて
いけるかを求めてきたと
いう歴史があります。ど
んな人種であっても実力
で出世できる。研究者
ミュージシャン、スポー
ツ選手、実業家、投資家
など1人で肩書きなしで
成功している人々の層が
多いんです。」

はありません。日本を、
肩書きを使つてしか存在
できない人々の集まりで
はなく、一人の個とし
て存在できる社会にした
いと思うのです。」



教育者のよみか

活躍しているかつて
の米国の教え子が「先生
のようにになりたいから先
生と同じ分野に進みまし
た。」と言つていたと聞
いて、黒川先生は教育
生たちが先生のことを
見ている。よく子供は
社会を映す鏡と言われま
す。学生は先生を映す
鏡です。先生の倫理観
や motivation など全
てが学生に反映するの
です。教育者は学生に影響
を与えることができる、
これは大きな責任である
と同時に喜びにも繋がる
ことです。」

ですが、学生は先生を映す
鏡です。先生の倫理観
や motivation など全
てが学生に反映するの
です。教育者は学生に影響
を与えることができる、
これは大きな責任である
と同時に喜びにも繋がる
ことです。」

医学教育改革へのエール

「日本では何か新しい
ことを提案すると必ず総
論賛成、各論反対にな
るんです。出来ない事情
があるのは百も承知です
が。」と黒川先生は苦笑
する。「でも出来ない理
由ばかり言うとか、国の
制度がどうにかしてくれ
るのを待ち続けるとかで
はなく、どうやったら
変わるかというのを考
えて1つでも実行して欲
しい。自分たちの出来
ることをまずやって初め
て文句が言えるというも
のです。医者なら医者
で自分たちの skin な
り quality なりをどう
やって上げていくか自
ら考えて、実践していく

のが大事です。世界に
通用するようなよりよ
い quality を自ら求め
ていく限り、日本の将来
は明るいと思います。だ
って皆優秀なのだから。
この優秀な人々の才能
をいかに伸ばすかが大切
で、彼らは日本の力にな
つていくでしょう。若い
人は自分の potential
を小さく見て無駄にしな
いで欲しい。そして、現
状から踏み出すことを恐
れずに自分にとって一番
challenging な場所
でがんばってみるといい
のではないですか。そ
れがまた他の日本人の元
気にもなるのですから。」



黒川 清 先生

「若い人は広く外を見
てきてほしい。若い人を
外に出してやり
なさい。」黒川先
生が若者に外の
世界を体験する
ことを勧めるの
はもちろん医学
教育改革のため
だけではない。
「外に出て常識を
覆されるような
ものを見てくる
すると視野が広
がります。一人
一人は素質があ
るけれど、自分
は何がやりたい
かということ
はたくさんもの
を見ないと分
からない。将来
への選択権は若い

黒川 清先生 御略歴	
昭和 42 年 3 月	東京大学大学院医学研究科修了
昭和 44 年 7 月	ペンシルバニア大学医学部生化学助手
昭和 46 年 7 月	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 医学部内科上級研究員
昭和 49 年 10 月	南カリフォルニア大学医学部 内科準教授
昭和 52 年 7 月	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 医学部内科準教授
昭和 54 年 7 月	カリフォルニア大学ロサンゼルス校 医学部内科教授
昭和 58 年 10 月	東京大学医学部第四内科学教室助教授
平成 元年 4 月	東京大学医学部第一内科学教室教授
平成 8 年 7 月	東海大学教授、医学部長（～平成14年）
平成 9 年 4 月	東京大学名誉教授
平成 14 年 4 月	東海大学教授、総合医学研究所長
平成 15 年 7 月	日本学術会議会長（現在） 総合科学技術会議議員（非常勤）
平成 16 年 2 月	東京大学先端科学技術研究センター 教授（客員）
平成 16 年 4 月	東海大学総合科学技術研究所教授